

■**梁田蛻巖** 漢詩人。祇園南海・服部南郭らと並ぶ近世有数の詩人であるが、近代に入り忘れられた。

やなだぜいがん

東 西 海 運 確 立 1672＝

下野国梁田村で、古河公方成氏の配下にあつて関東管領家のために活躍した武将梁田政信を祖とする蒔田氏家老梁田勝秀の第五子に生まれる。名は邦美、字は景鸞。

徳川綱吉将軍1680＝ 8歳：処士大橋大橋平兵衛に就いて孝経・小学を読み、

天下一禁止・1681＝ **9歳**：

好色一代男・1682＝10歳：披髪して儒生となり、出府。すぐ上の兄勝信とともに、**幕府の儒官人見鶴山に入門。謹直な林門にあつて珍しく文事芸術を愛好する師鶴山の感化を受け、詩文への才能が開花、**

八百屋お七・1683＝11歳：**早くも、厩橋藩主に召された塾頭に従った際にものした紀行詩が高く評価される。**

堀田正俊暗殺1684＝12歳：江戸に戻って、以後、ひたすら儒学を研鑽。のちに勝信が儒を業として高崎侯に仕えるなど、自分の代に武を廃したことに慙愧、強く武に憧れ、文人には稀なほど屈強剛健な性格になる。**この間、性霊派の袁中郎・徐文長に傾倒し、おのれの心情に基づいて自由に創作することに開眼する一方、自己の情動のままに行動し、慎重に振る舞うことを嫌ったため、**

日本永代蔵・1688＝16歳：恩師鶴山が死去。蒔田氏の配慮で、**加賀藩の儒官に推挽され、条件も決まって、**

湯島聖堂・・1690＝**18歳**：
別子銅山始・1691＝19歳：この年、林鳳岡が林家を継ぐ。蒔田氏が死去した年に、**加賀藩主に謁見、直後に父が急逝、**

奥の細道・・1693＝21歳：**いよいよ仕官したが、2年放置された上に、俸禄の少ないことに憤激、上疏して致仕してしまう。束髪して才右衛門と名乗り、母と長兄が支える家に居候しながら、次兄と塾を開いて舌耕生活、安定する藩儒の地位を求め、林家への入門を望むも果たせず。苦境を跳ね返すべく、傑作「九日」をものする。**

生類憐令頂点1695＝23歳：**新井白石の弟子益田鶴楼と出会い意気投合、放蕩も始まる。**

・・・・・1697＝25歳：**鶴楼の紹介で新井白石に謁する一方、ようやく、美濃加納藩の世子戸田光照から招聘され、四書五経を講じる。同藩の儒官多湖栢山と出会い、**

・・・・・1699＝**27歳**：

赤徳浪士討入1702＝30歳：多湖栢山に贈った詩があるなど、**風雅の交わりもするが、江戸との間を何度も往復できたにもかかわらず、仕官の身に拘束を感じて不満を抱くようになり、**

御蔭参流行・1705＝33歳：藩主が死去して、戸田光照が遺領を継ぐと、

・・・・・1706＝34歳：病と称して、**致仕してしまう。江戸に戻り、芝で塾を開くも、悪友鶴楼との遊蕩もあつて、生徒も集まらず、生活が窮乏するなか、**

徳川綱吉没・1709＝37歳：

乾山陶器店・1712＝40歳：小田原の処士の娘と**結婚すると、放蕩に拍車がかかってますます窮乏。この年の書簡にあるように、白石から“天下の学風”を身につけるよう度々指南されるも、結局、詩文に耽るままで、のちには白石を裁断するような文「信西論」も書いている。この前後、袁中郎・徐文長に親しみ、**

和漢三才図会1713＝41歳：神田に転居。子が生まれた上、妻が病臥、生徒も来なくなり、桂川貞輔の経済的援助で何とか凌ぐ。**極限に至ってまたもそれを跳ね返すように、徐文長にならった一大雄編となる七言律詩「詠雪」をものする。毎年のように火災に遭って、家居も転々。多くの儒者から生き方を非難されるなか、**

国姓爺合戦・1715＝43歳：若くして水戸彰考館総裁に拔擢されていた三宅観瀾と出会い、自分の文才を認めて貰い、

徳川吉宗将軍1716＝44歳：実現はしなかったが彰考館にまで推挽してくれ、火災見舞いまでくれる関係になる。***将軍家継が死去して、新井白石が罷免され、林家が息を吹き返したのを見るや、彦根藩文学のついで、林家入門を果たし、**

隅田川の桜・1717＝**45歳**：**林家の高足で幕府儒官桂山彩巖の知遇を得、彩巖から鼓舞されたことに感激し、仕官の斡旋を依頼、**

御蔭参流行・1718＝46歳：三宅観瀾が死去、「祭三宅観瀾文」を書いて悼む。

・・・・・1719＝47歳：口上手ぶりを発揮して、***明石藩主松平直常に文学として召され、積年の窮状を脱する。**

洋書輸入解禁1720＝48歳：第二子が誕生。

当初は、江戸に馴染んだ身にとっては文化辺地といえる明石に不満を募らせるものの、

懷徳堂公認・1726＝**54歳**：

・・・・・1727＝55歳：早くも加増されるなど、**藩主の礼遇もあつて、次第に、室鳩巢の説くような生き方を身につけ、平穏な後半生となつて行く。**

この間、例の率直さが出、彩巖を批評してその機嫌を損ね、ひたすら弁明に努めたりし、

享保大飢饉・1732＝60歳：この頃の作***「孟夏歩近郊至赤浦書懷」で、なお、江戸に惹かれるものの明石に永住する覚悟を詠むに至る。**

昆陽蕃諸考・1735＝**63歳**：再び加増。

自らが先天的に備えている粗悪さを常に反省すべく、書齋に“?(穴カンムリに瓜二つ)”の字の扁額を掛け、純粹無垢な“誠”を求めることよつて、**人間性を意識的に陶冶し、媚態を呈さない毅然とした人格者に変貌、袁中郎に学んだ童心説によって、詩人としての自己を支えて、ついに一家を成し、悠々と詩三昧の生活、青年らから敬意を表されることも多く、**

・・・・・1738＝66歳：弱冠18歳の清田? 叟から初めて書牘を呈されたのに刺激され、精神が緊張して昂り、挨拶の書を送る。

・・・・・1743＝71歳：**独礼を許され、**

梅岩没・・・1744＝**72歳**：

・・・・・1749＝77歳：

・・・・・1750＝78歳：桂山彩巖が死去した際にも、追悼文。

徳川吉宗没・1751＝79歳：老躯をおして大坂に遊び、門人の別荘に滞在し、柳沢汎園と邂逅、その指画竹を見て賦しているなど、**なお精神力旺盛であつたが、**

薩摩藩工事・1753＝**81歳**：

・・・・・1756＝84歳：**妻が死去して落胆し、**

源内物産会・1757＝85歳：まだ27歳ながら{懷徳堂}を主宰する中井竹山が来訪、諄々と教導したのを最期に、**没した。**

徳田武「江戸詩人伝」、